

規制の事後評価書

法律又は政令の名称：労働安全衛生法施行令の一部を改正する政令

規制の名称：石綿の製造等に関する規制の見直し

規制の区分：新設、改正（拡充、緩和）、廃止 ※いずれかに○印を付す。

担当部局：労働基準局安全衛生部化学物質対策課

評価実施時期：令和5年12月

1 事前評価時の想定との比較

- ① 課題を取り巻く社会経済情勢や科学技術の変化による影響及び想定外の影響の発現の有無

規制の事前評価後、課題を取り巻く社会経済情勢や科学技術の変化による影響が生じている場合、その影響について記載する。また、規制の事前評価時には想定していなかった影響が発現していないかを確認し、発現の有無及びその内容を記載する。

事前評価後、現時点においては課題を取り巻く社会経済情勢や科学技術の変化による影響及び想定外の影響は生じていない。

- ② 事前評価時におけるベースラインの検証

規制の事前評価後、大幅な社会経済情勢等の変化による影響があった場合は、これを差し引いた上で、事後評価のためのベースライン（もし当該規制が導入されなかったら、あるいは緩和されなかったらという仮想状況）を設定する。

事前評価時点では、全ての石綿の製造等が原則禁止されており、新たに石綿を製造することが不可能であるところ、建築物の解体作業時等に行う石綿の分析のための試料に用いられる石綿や石綿の使用状況の調査を行う者の教育に用いられる石綿（以下「石綿分析用試料等」という。）が国内で不足してきていたところで、これらの製造等を認めなければ、建築物の解体作業時等の石綿の分析や調査を適切に行うことができず、ひいては労働者の健康障害防止措置を充実させることができない状況であった。仮に、当該規制措置が実施されなかった場合、建築物の解体作業時等の石綿の分析や調査を適切に行うことができないまま、作業中に石綿を発散させ、労働者等に遅発性疾患たる石綿肺等の健康障害を発生させた可能性が高い。

③ 必要性の検証

規制の事前評価後に生じた、課題を取り巻く社会経済情勢や科学技術の変化による影響又は想定していなかった影響の発現を踏まえた上で、当該規制の必要性について改めて検証し、記載する。

規制の事前評価後、社会経済情勢や科学技術の変化は特段認められなかった。建築物の解体作業時等の石綿の分析や調査を適切に行うため、石綿分析用試料等の製造許可制度は必要である。

2 費用、効果（便益）及び間接的な影響の把握

④ 「遵守費用」の把握

「遵守費用」、「行政費用」について、それぞれ定量化又は金銭価値化した上、把握することが求められるが、特に「遵守費用」については、金銭価値化した上で把握することが求められる。その上で、事前評価時の費用推計と把握した費用を比較し、かい離がある場合、その理由を記載する。

【事前評価時の測定指標】

本規制により、事業者等に新たな措置を義務付けることに伴い発生する主要な費用は、以下のとおりである。

- ・ 作業主任者の選任（技能講習の受講料：数千円～）
- ・ 作業環境測定の実施（年間数万円～）
- ・ 特殊健康診断の実施（1人当たり年間数千円～）
- ・ 容器・包装への表示（1事業者当たり年間数万円～）
- ・ SDSの交付（1事業者当たり数千円～）

【遵守費用】

本規制により発生した費用は事前評価時の指標のとおりである。

⑤ 「行政費用」の把握

行政費用については、定量化又は金銭価値化した上、把握することが求められる。特に規制緩和については、緩和したことで悪影響が発生していないか等の観点から、行政としてモニタリングを行う必要が生じる場合があることから、当該規制緩和に基づく費用を検証し「行政費用」として記載することが求められる。また、事前評価時の費用推計と把握した費用を比較し、かい離がある場合、その理由を記載する。

【行政費用】

国において、石綿に係るモデルSDSは作成済みであることから、本規制の新設に伴う費用の増減はない。

⑥ 効果（定量化）の把握

規制の事前評価時に見込んだ効果が発現しているかの観点から事前評価時に設定した指標に基づき効果を可能な限り定量的に把握する。また、事前評価時の効果推計と把握した効果を比較し、かい離がある場合、その理由を記載する。

【労働者への便益】

石綿粉じんのばく露の防止等により、職業がん等の発症による労働者の健康障害を防止することができる。

【事業者への便益】

健康障害防止措置の実施による、労働災害発生件数の減少により、保険料負担コストを低減することができる。また、労働者災害補償保険法（昭和 22 年法律第 50 号）による保険給付の総量が抑えられることにより、事業者全体にとって、保険料負担の軽減につながるものである。

【国民全体への便益】

労働者の健康確保と事業者の経営の安定化が図られる。

⑦ 便益（金銭価値化）の把握

把握された効果について、可能な限り金銭価値化して「便益」を把握することが望ましい。なお、緩和により削減された遵守費用額は便益として把握する必要がある。また、事前評価時の便益推計と把握した便益を比較し、かい離がある場合、その理由を記載する。

効果（便益）について、具体的な額として金銭価値化することは困難である。

⑧ 「副次的な影響及び波及的な影響」の把握

副次的な影響及び波及的な影響を把握し、記載する。また、規制の事前評価時に意図していなかった負の影響について把握し、記載する。さらに、事前評価時に想定した影響と把握した影響を比較し、かい離がある場合、その理由を記載する。

※ 波及的な影響のうち競争状況への影響の把握・分析の方法については、公正取引委員会が作成するマニュアルを参照のこと。

※ 規制の事前評価時に意図していなかった負の影響の把握については、ステークホルダーからの情報収集又はパブリックコメントなどの手法を用いることにより幅広く把握することが望まれる。

副次的な影響及び波及的な影響は特にない。

3 考察

⑨ 把握した費用、効果（便益）及び間接的な影響に基づく妥当性の検証

把握した費用、効果（便益）及び間接的な影響に基づき、規制の新設又は改廃の妥当性について考察を行う。また、考察に基づき、今後の対応について検討し、その結果を記載する。

本規制の便益は、製造等が可能となる一部の石綿による労働者の職業がん等の健康障害の防止に資することである。

費用については、ジクロロベンジジン等他の有害物に対しても既に労働者の健康障害防止を図っており、今回の規制もほぼ同様の枠組みのものであることから、行政の費用が増加することはない。また事業者については遵守費用が増加するものの、労働災害発生件数の減少による、保険料負担コストの低減等の便益を得ることができることから、ばく露防止対策等の義務付けは妥当である。

※ 当該規制に係る規制の事前評価書を添付すること。

規制の事前評価書

法律又は政令の名称：労働安全衛生法施行令の一部を改正する政令案

規制の名称：石綿の製造等に関する規制の見直し

規制の区分：新設 改正（拡充、緩和） 廃止 ※いずれかに○印を付す。

担当部局：労働基準局安全衛生部

評価実施時期：平成29年11月

1 規制の目的、内容及び必要性

① 規制を実施しない場合の将来予測（ベースライン）

「規制の新設又は改廃を行わない場合に生じると予測される状況」について、明確かつ簡潔に記載する。なお、この「予測される状況」は5～10年後のことを想定しているが、課題によっては、現状をベースラインとすることもあり得るので、課題ごとに判断すること。（現状をベースラインとする理由も明記）

労働安全衛生法（昭和47年法律第57号。）第55条では、労働者に重度の健康障害を生ずる物で、政令で定めるものは、製造、輸入、譲渡、提供、又は使用（以下「製造等」という。）をしてはならないこととしている。また同条に基づき、労働安全衛生法施行令（昭和47年政令第318号）第16条第1項4号において、製造等が禁止されている物質として「石綿」を規定している。

しかし、上記のとおり現在は全ての石綿の製造等が原則禁止されており、新たに石綿を製造することが不可能であるところ、建築物の解体作業時等に行う石綿の分析のための試料に用いられる石綿や石綿の使用状況の調査を行う者の教育に用いられる石綿が国内で不足してきている状況にあり、これらの製造等を認めなければ、建築物の解体作業時等の石綿の分析や調査を適切に行うことができず、ひいては労働者の健康障害防止措置を充実させることができないため、これらの石綿の製造等を可能とする必要がある。

しかし、石綿は高い有害性を有していることが確認されており、製造等を原則禁止しているものであることから、労働者の健康障害を防止するため、これらの石綿等の製造をする場合には厚生労働大臣の許可、作業主任者の選任、作業環境測定の実施、特殊健康診断の実施を行わなければならないこととし、また、これらの石綿等を譲渡・提供する場合にはその名称等の表示及び通知を行わなければならないこととする。（以下これらの規制を「本規制」という。）

② 課題、課題発生の原因、課題解決手段の検討（新設にあつては、非規制手段との比較により規制手段を選択することの妥当性）

課題は何か。課題の原因は何か。課題を解決するため「規制」手段を選択した経緯（効果的、合理的手段として、「規制」「非規制」の政策手段をそれぞれ比較検討した結果、「規制」手段を選択したこと）を明確かつ簡潔に記載する。

上記のとおり、建築物の解体作業時等に行う石綿の分析のための試料に用いられる石綿や石綿の使用状況の調査を行う者の教育に用いられる石綿が国内で不足してきている課題を踏まえ、石綿の分析のための試料の用に供される石綿等の製造を可能とする。

一方、石綿は高い有害性を有していることが確認されており、製造等を原則禁止しているものであることから、これらの石綿等の製造をする場合には厚生労働大臣の許可、作業主任者の選任、作業環境測定の実施、特殊健康診断の実施を行わなければならないこととし、また、これらの石綿等を譲渡・提供する場合にはその名称等の表示及び通知を行わなければならないこととする。

なお、単に石綿の分析のための試料の用に供される石綿等の製造等を可能とするだけでは、当該石綿等を製造する労働者に石綿による健康障害を生じさせることとなるため、健康障害防止措置の実施を義務づけることとする。

2 直接的な費用の把握

③ 「遵守費用」は金銭価値化（少なくとも定量化は必須）

「遵守費用」、「行政費用」について、それぞれ定量化又は金銭価値化した上で推計することが求められる。しかし、全てにおいて金銭価値化するなどは困難なことから、規制を導入した場合に、国民が当該規制を遵守するため負担することとなる「遵守費用」については、特別な理由がない限り金銭価値化を行い、少なくとも定量化して明示する。

【遵守費用】

本規制により、事業者等に新たな措置を義務付けることに伴い発生する主要な費用は、以下のとおりである。

- ・ 作業主任者の選任（技能講習の受講料：数千円～）
- ・ 作業環境測定の実施（年間数万円～）
- ・ 特殊健康診断の実施（一人当たり年間数千円～）
- ・ 容器・包装への表示（1事業者当たり年間数万円～）
- ・ SDSの交付（1事業者当たり数千円～）

【行政費用】

国において、本規制の新設に伴う費用、人員等の増減はない。

※ 国において、石綿に係るモデルSDSは既作成であることから、行政の費用が増加することはない。

【その他の社会的費用】

特になし。

④ 規制緩和の場合、モニタリングの必要性など、「行政費用」の増加の可能性に留意

規制緩和については、単に「緩和することで費用が発生しない」とするのではなく、緩和したことで悪影響が発生していないか等の観点から、行政としてモニタリングを行う必要が生じる場合があることから、当該規制緩和を検証し、必要に応じ「行政費用」として記載することが求められる。

石綿の分析のための試料の用に供される石綿等の製造を可能とする一方、これらの石綿等の製造をする場合には厚生労働大臣の許可、作業主任者の選任、作業環境測定の実施、特殊健康診断の実施を行わなければならないこととし、また、これらの石綿等を譲渡・提供する場合にはその名称等の表示及び通知を行わなければならないこととするが、既に他の有害な化学物質に対してこれと同様の枠組みの規制を敷いているため、規制緩和等についてモニタリングを行う必要はない。

3 直接的な効果（便益）の把握

⑤ 効果の項目の把握と主要な項目の定量化は可能な限り必要

規制の導入に伴い発生する費用を正当化するために効果を把握することは必須である。定量的に記載することは最低限であるが、可能な限り、規制により「何がどの程度どうなるのか」、つまり定量的に記載することが求められる。

【労働者への便益】

石綿粉じんのばく露の防止等により、労働者の職業がん等の発症による健康障害を防止することができる。

【事業者への便益】

健康障害防止措置を実施することにより、労災の補償リスクを低減することができる。また、労災補償保険法による保険給付の総量が抑えられることにより、事業者全体にとって、保険料負担の軽減につながるものである。

【国民全体への便益】

労働者の健康確保と事業者の経営の安定化が図られる。

⑥ 可能であれば便益（金銭価値化）を把握

把握（推定）された効果について、可能な場合は金銭価値化して「便益」を把握することが望ましい。

効果（便益）について、具体的な額として金銭価値化することは困難。

⑦ 規制緩和の場合は、それにより削減される遵守費用額を便益として推計

規制の導入に伴い要していた遵守費用は、緩和により消滅又は低減されると思われるが、これは緩和によりもたらされる結果（効果）であることから、緩和により削減される遵守費用額は便益として推計する必要がある。また、緩和の場合、規制が導入され事実が発生していることから、費用については定性的ではなく金銭価値化しての把握が強く求められている。

緩和により消滅又は低減される遵守費用はない。

4 副次的な影響及び波及的な影響の把握

⑧ 当該規制による負の影響も含めた「副次的な影響及び波及的な影響」を把握することが必要

副次的な影響及び波及的な影響を把握し、記載する。

※ 波及的な影響のうち競争状況への影響については、「競争評価チェックリスト」の結果を活用して把握する。

特になし。

5 費用と効果（便益）の関係

⑨ 明らかとなった費用と効果（便益）の関係を分析し、効果（便益）が費用を正当化できるか検証

上記2～4を踏まえ、費用と効果（便益）の関係を分析し、記載する。分析方法は以下のとおり。

- ① 効果（便益）が複数案間でほぼ同一と予測される場合や、明らかに効果（便益）の方が費用より大きい場合等に、効果（便益）の詳細な分析を行わず、費用の大きさ及び負担先を中心に分析する費用分析
- ② 一定の定量化された効果を達成するために必要な費用を推計して、費用と効果の関係を分析する費用効果分析
- ③ 金銭価値化した費用と便益を推計して、費用と便益の関係を分析する費用便益分析

本規制の便益は、製造等が可能となる一部の石綿による労働者の職業がん等の健康障害の防止に資することである。

費用については、ジクロロベンジジン等他の有害物に対しても既に労働者の健康障害防止を図っており、今回の規制もほぼ同様の枠組みのものであることから、行政の費用が増加することはなく、また事業者については遵守費用は増加するものの、労災の補償リスクの低減等の便益を得ることができることから、ばく露防止対策等の義務付けは適当と判断する。

6 代替案との比較

- ⑩ 代替案は規制のオプション比較であり、各規制案を費用・効果（便益）の観点から比較考量し、採用案の妥当性を説明

代替案とは、「非規制手段」や現状を指すものではなく、規制内容のオプション（度合い）を差し、そのオプションとの比較により導入しようとする規制案の妥当性を説明する。

代替案（国の通達による行政指導）では、対策を取る事業者については本規制同様、遵守費用が発生するにもかかわらず、事業者には法的な義務を伴わないことから、企業で必要な対策が十分に実施されず、そのため、労働者の職業がん等の発症防止等について効果が限定される。

したがって、全ての事業場において、製造等が可能となる一部の石綿による労働者の健康障害防止措置を履行させるため、通達による指導（代替案）でなく、罰則を伴った法的拘束力を持つ本規制案を採用すべきである。

7 その他の関連事項

- ⑪ 評価の活用状況等の明記

規制の検討段階やコンサルテーション段階で、事前評価を実施し、審議会や利害関係者からの情報収集などで当該評価を利用した場合は、その内容や結果について記載する。また、評価に用いたデータや文献等に関する情報について記載する。

本規制を検討する段階で、本事前評価を活用し、本規制が妥当であると判断した。

8 事後評価の実施時期等

- ⑫ 事後評価の実施時期の明記

事後評価については、規制導入から一定期間経過後に、行われることが望ましい。導入した規制について、費用、効果（便益）及び間接的な影響の面から検証する時期を事前評価の時点で明確にしておくことが望ましい。

なお、実施時期については、規制改革実施計画（平成 26 年 6 月 24 日閣議決定）を踏まえることとする。

石綿による労働者の健康障害を防止する観点から、製造等が可能となる一部の石綿の製造等を行う必要性がなくなった場合等に見直しを行う。

- ⑬ 事後評価の際、費用、効果（便益）及び間接的な影響を把握するための指標等をあらかじめ明確にする。

事後評価の際、どのように費用、効果（便益）及び間接的な影響を把握するのか、その把握に当たって必要となる指標を事前評価の時点で明確にしておくことが望ましい。規制内容によっては、事後評価までの間、モニタリングを行い、その結果を基に事後評価を行うことが必要となるものもあることに留意が必要

石綿の分析のための試料に用いられる石綿や石綿の使用状況の調査を行う者の教育に用いられる石綿の国内の製造状況や、建築物の解体作業時等の石綿の分析や調査の実施状況や必要性等を踏まえて評価を行う。